

基調講演「エコロジカルな都市近郊里山林の保全・管理と市民参加」

重松 敏則（九州芸術工科大学教授）

人間の暮らしとともに成立した里山

里山というのは北海道から九州までどこにでもあり、気候帯により構成樹種は違うものの、原理的には全く一緒です。なぜ里山が成立したかと申しますと、人間の生活には暖房や炊事に燃料が不可欠です。古くから人間は身近なところで継続的に木を切り、薪にしたり炭を焼いたために、都市の周辺や集落の周りに人の暮らしと連動した森林が成立していました。そのような森林が里山であり、北海道は開拓が明治の初めであったため、里山の成立も本州と比べて遅いものの、実態としては存在します。

昨日、藻岩山、大倉山、西野の森を訪れたのですが、そこに里山が存在しており、非常に感激しました。では何故里山とわかったのかと申しますと、3つの視点があります。まず1つ目は落葉広葉樹林であることです。本州ではアカマツ林もございますが、北海道は基本的に落葉広葉樹林です。2つ目は比較的林が若いということです。巨木や老樹、大樹はなく、せいぜい30～40年の林で、このあたりでも30～40年前までは薪や炭の生産林として木を切っていたということになります。そして3つ目、これが一番重要な点ですが、林のそこそこに3本立ちや4本立ちといった株立ちをした木があることです。これは過去に、切っては切株から萌芽し、15～20年経つとまた切るということを繰り返していたため、これが里山の識別の重要なポイントです。ということで北海道にも、札幌近郊にも里山があるというのは明らかであります。

また、里山は日本だけではなく、アジアやヨーロッパにもあります。日本の里山が役割を喪失して切られなくなったために、どんどん密生し、林床の多様な花も咲かなくなっていることをイギリスで話した際、「イギリスと同じではないか」とイギリス人に言われました。人間の生活や都市・産業が発達する前は周囲の林のみを利用していたのですが、発達するにつれて周辺だけでは足りなくなり、川や海の水運を利用して奥地や遠方の林も燃料源として切られました。農山村の人にとってはそれが重要な現金収入の源となり、非常に重要な産業でもありました。

評価される新たな社会的役割

このように人間の暮らしとともに生み出され存続してきた里山ですが、40～50年前の燃料革命により役割を失って放置されています。ところが近年になり役割が再び評価され始め、市民参加の管理活動が盛んになってきています。その理由として、ここでは4つの点を挙げたいと思います。

まず1番目に、身近な自然であり、少なくとも私の世代以上の方であれば里山で遊んだというノスタルジーのある景観、環境であるということです。その様な世代の人が高度経済成長の中で一生懸命働いてきてホッとした頃、もう一度都市の生活から離れた、思い出のこもった森の中で過ごしたいという回帰意識が挙げられると思います。2番目として、季節の景観の多様性、生物の多様性に富んだ里山が、地球環境の破壊によって種がどんどん絶滅する中、もう一度再評価され、その重要性が認識されたということです。3番目として、管理が放棄されることによって林内が暗くなり、林床では花も咲かなくなると、季節感も失われていった里山を、自分たちの余暇時間を活かしたりフレッシュ活動の場として、景観性や種の多様性を回復することの喜びに気づいた人たちが活動を展開しだしたということです。さらに4つ目として、地球環境に負荷を与えないバイオマス資源として、里山は持続的に太陽エネルギーを固定して生産し、持続的に利用できるという点においていい見本となっていることであります。伐採更新によって得られる木材をバイオガスや発電に利用することによって、今後の炭素税の導入といった化石燃料を規制する世界的な動きの中で、バイオマス資源としての役割が注目され始めたということです。

かつて、自然の恵みに依存した暮らしの時代は、人間は自然と濃密な関係をもっていたのに対し、石油・石炭の時代、原子力の時代になり、人間がどんどん自然から離れて人工的な環境の中で生きようになりました。人類が現れてから非常に気の遠くなるような長い間、人間は自然の中で暮らしてきたのですが、それに比較すると自然から離れて暮らすほんの一瞬の期間に劇的な変化が起っています。その中で精神的にも肉体的にも対応できなくなり、いろいろな社会病理的な問題が生じています。そんな中、もう一度人間性を取り戻し、温かい安定した社会を構築する際、身近な里山を市民参加の活動の場としてリフレッシュし、楽しく過ごすことにより、自然との濃密な体験、コミュニティを再構築する場として、里山は今後非常に重要な役割を果たすと思われます。

人の手入れが生み出した景観と種の多様性

かつて、日本人が農耕生活をするようになると、原生林を破壊して棚田を作ったり、継続的に木材や薪炭材をとるなどして原生林を里山の二次林に変えたりしました。しかし、このようにかつてはなかった棚田の水環境を創出することにより、ドジョウやタニシ、メダカといった色々な水生生物が住める空間が生み出され、それを食べるシラサギやツルも来る

ようになって、ここに自然を破壊したにもかかわらず代償作用として景観の多様性や種の多様性が作り出されたのです。北海道には棚田がありませんので景観は違うものの、森林が開拓されて農地がつくられ、本州と同様にかつては無かった環境や景観が生み出されました。

一般に里山の伐採は15~20年周期で行われました。伐採更新のサイクルが14年周期の場合だと、もち山を14等分し、毎年1/14を薪や炭を生産するために伐採します。それぞれ翌年その切り株から芽が出て、年々成長し、14年目になるとまた切れることになり、毎年確実に1/14ずつの収穫を得ることができます。持ち主は景観や種の多様性のことまで考えていたわけではありませんが、副次的に14通りの景観がモザイク状に形成され、野生生物にとっても日がさんと降り注ぐ野原の状態が適した昆虫や鳥類、ある程度に森林の再生が進んだ半日陰の状態を生活域とする動植物、さらに林冠が閉鎖され、林内が暗くなった状態が生活に適した動植物など、それぞれにとって変化の富んだ環境を用意することになります。

また、林床が柴刈りされた落葉広葉樹林では、冬になると林内に光が入り、カタクリのような春植物が花を咲かせるといふ里山林特有の景観と自然が生み出されます。北海道にもカタクリの景観がありますが、これを保護しようとフェンスで囲んで立ち入り禁止にし、手つかずで守ろうとした場合、低木類が生い茂るようになって、冬も早春にも林床に光が当たらなくなり、カタクリは消えていってしまいます。カタクリを保護したつもりが結果として消えてしまい、餌の少ない早春にカタクリの花の蜜や葉に依存していた昆虫が生きられなくなり、その昆虫を餌としている野鳥も生きていけなくなる事態が生じます。「自然保護=一切手をつけない」という考え方の人がまだ多くみられますが、このように里山の自然は的確な人間の管理が必要で、それにより特有の景観や動植物が生きていくことができます。カタクリだけでなく、キクザキイチゲやヤマブキソウといった多様な春植物の多くは人間の管理の下に存続することができます。

このスライドは伐採更新を繰り返すことで林地に光が入り成立する、新芽が萌え、野生のツツジが一面に咲く春の雑木林の風景です。アカマツの二次林でも、低木類を刈り取ることによって見通しのきいたアメニティ空間が形成されました。一方、萱葺き屋根を葺く材料や、牛や馬の飼料を採取する萱場は、毎年火入れをすることにより、草地の景観が維持されます。阿蘇山や久住山では火を放って草地を維持し、牛や羊を放牧してきましたが、家畜がミヤマキリシマやアセビといった有毒植物を食べ残すことによって、特有の景観・自然が成立し、ここでも人間が介在することによる新たな環境と新たな自然景観が成立しています。

## 変容する里山の自然と環境

以上のように、土地の土壌水分条件等も上手に活用しながら人間は里山を管理して暮らしを立ててきました。ところが40~50年前より、里山は役割を失ったことから、全国の都市近郊でゴルフ場開発や宅地造成等によって里山が削られ、山裾まで都市化が進みました。

スライドは私の住んでいる福岡の土地利用ですが、昭和11年頃は都市の規模が限られ、平地の多くが農地です。緑の部分が里山林で、終戦後から昭和35~40年代頃まではこの地域も薪炭林として管理・利用されていました。平成4年になると、農地はほとんど市街化され、山裾や丘陵の里山も宅地化され、スポット的にしか里山が残されていません。このような状況は札幌をはじめ日本全国で生じてきました。現在は山裾まで市街化が進み、かつて里山・農地だった部分が丘陵部分に断片的に残っておりますが、その1つが福岡市の鴻巣山緑地保全地区として指定されています。中に入ると「ここが都市の中か」と思うくらい立派な森が成立しており、現在では非常に貴重な森となっています。ところが当然のことで、里山管理はされておらず、どんどん密生化が進んでいます。それにより林内に太陽の光が入らず、林床が裸地化して、一部を除き低木・草も生えない状況になっています。ヤマザクラも被圧されて、下枝が枯れ、上部の梢でかろうじて花を咲かせている状態で、なかには立ち枯れした木も多くみられます。昔はこの森林を15年程度の周期で伐採更新することによって太陽の光を入れ、ヤマザクラ、クリ、ハリギリ、ホオノキといった落葉広葉樹が入り、生きていけるチャンスが与えられていました。それが管理されなくなることにより、まず林床の植物が消え、次に上層木を構成していたヤマザクラといった落葉広葉樹も消えていっています。そのうち、福岡の市民は春になっても、新芽が萌え出る風景も、ヤマザクラの花を見ることもできず、また、秋になっても紅葉の風景も見られないことになります。

さらに、都市近郊林が持つ都市の空気をきれいにするという「都市の肺」としての役割や、既に述べたようにリフレッシュの場といったアメニティ的機能として、以前にもまして里山・都市近郊林の役割は重要になってきています。ただし持ち主にとっては社会的効果に対する見返りがなく、なかなか守りきることができないため、拡大造林政策に合わせてスギ・ヒノキ林に替わってしまった林地も少なくありません。北海道でもトウヒといった針葉樹の植林が進んだと思いますが、これにより季節の景観性を失ってしまいます。

また人工林に替えた場合、的確な管理が必要なのですが、安価な輸入材が入ってくる上に、過疎化が進み担い手がいないために放置されて、もやし林となり、ちょっとした雪が降ると支えきれなくて折れてしまったり、台風がくると壊滅的な被害を受けてしまいます。また林内に陽光が当たらないた

め林床が裸地化し、遠くからは「緑豊かな山」のように見えるのですが、林内に入ると何も生えておらず、大雨が降った際には、雨水が染み込みきれずに地表面を流れ出し、土壌が侵食されてしまいます。既に根が浮き出し、土地が痩せて、伐採しても次の苗が育ちにくい状況も生じています。一般の人たちは「森があれば常に谷川に水が流れ出す」と思い込んでいますが、森の内容によっては雨が降った直後に鉄砲水が流れ、すぐに涸れ川となる場合もあります。このような河川では、洪水を防止するために三面張り直線化してしまうことが多いです。従って、山の状況が都市の河川の状況を変えてきたとも言えます。最近のドイツやスイスでは、近自然河川工法ということで三面張りの川がもう一度草土手の蛇行した川に直されるという取組み起こっています。いずれにしても、健全で水源涵養能力の高い森林にするには、的確な間伐管理によって陽光を林内に入れ、下生えや落ち葉層を発達させることが重要です。このような基本的な原理は、生態学、林学、造園学等でも明らかなことであるにもかかわらず、それがなかなか社会に認知されず、遅々として進まないのが実状です。

結論を先に言いますと、この様な里山の状況を広く市民に知ってもらう必要がありますが、それには市民が観念的に森や自然を考えるのではなく、実際に現場に入って活動することにより実感してもらうのが最も効果的で、その意味で市民参加の里山管理は非常に重要です。

関西や九州では放置された里山がどんどん密生して、見通しがきかず、山にハイキングに行っても楽しめず、かえって不安になります。先ほど紹介した久住山におけるミヤマキリシマの咲く特有の国立公園の景観も、放牧や火入れがされなくなって森林化が進みつつあります。ところで、放置された里山の林内が暗くなったとはいえ、自然度は高くなっているわけで、原生林のほとんどが失われている現状を考慮すると、喜ぶべきことなのかもしれません。しかし、全面的に自然林に戻ってしまうと、先ほどのカタクリの例のように困ってしまうのです。

ここでは野生ツツジの例について紹介したいと思います。関西地方の里山に多いヤマツツジやコバノミツバツツジといった野生のツツジ類は、前年の夏にある程度以上の陽光が葉面に当たると成長点に花芽が分化されます。光が弱いと花芽をつくることができず、葉芽しかつくることができません。林の奥の暗いところで生えていた場合は、春になっても花を咲かせることができず、明るいところで生えていた場合には花を咲かせ、花が散ったあとに葉芽が展開します。従って、里山が放置され、暗くなっていくと花が咲かなくなり、人間にとって春が来てもちっとも楽しくなくなってしまいます。また、花が咲かないと蜜が吸えず、蜂や蝶もいなくなり、そうすると野鳥も餌が得られず、いなくなってしまいます。

## 回復したい里山の自然・文化と原体験

そこで、このように放置された里山をもう一度的確に管理することによって、多様なアメニティ利用に即した森づくりをすることができないか、また、いろいろな環境をつくることにより多様な動植物が生きていけることを目標に、私は里山の植生管理をテーマに長年生態的な研究をしてきました。先ほどのツツジの事例に関連して研究の一部をご紹介します。低木が密生する里山のコナラ林において、開花景観を再現するために選択的下刈りにより、コバノミツバツツジだけを残し、他の低木類を全部取り除きます。その後、高木層のコナラも1/3~1/2間伐し、陽光を入れると、翌春には一面ツツジが満開になり、都市公園にはない非常に魅力的な空間が成立しました。里山はこれくらい潜在力をもっており、手のかけ次第で土壌微生物層、草本層、低木層、高木層という多層社会が成立し、また、魅力的な景観ができあがります。密生する低木類の下の暗い環境で1枚葉で耐えているササユリも、低木類を刈り取り、高木層も間伐して林に光を入れると、3~4年目には花を咲かせるまでに成長します。また、林床を異なった頻度や時期に刈り取った場合、林床植生はそれに反応し、被度、高さ、種組成に変化が起きますので、多様なタイプの林床植生に誘導することができます。

ところで、この様な結果を活用すれば理想の森林空間ができるのですが、困ったことにその担い手がおらず、もちろん農家も生産的利益がないということで行いません。イギリスでは農家を「国土の庭師」と呼んでいます。日本の農家も日々の生産活動を通してこの様な空間や景観をつくる庭師的な役割を担ってきたのですが、現在はもはや期待できない時代になってしまいました。どんどん高齢化が進み、棚田も生産性がない、担い手がないということで放棄され、藪化が進んでいます。祖先が営々と築いてきた棚田の石積みが崩れても修復できず、放置するか、コンクリートブロックで積み直され、まるで景色の中に絆創膏を貼っているかのようなみっともない風景になっています。ブロックの場合には隙間がなく、ヘビやトカゲも住めないばかりか、ヒガンバナも取り着くことができません。草刈りの手間を省くということで、水路等もコンクリート化し、田園風景が変化しているのみならず、水田地帯にも都市化が進み、さらに里山の山裾を這い上って、都市砂漠が広がっています。

かつては8割の日本人が農山村に居住し、一面のレンゲ畑で遊んだり、小川で遊ぶといった行為は当たり前のことで、非常に濃密な自然体験をしていました。都市もこじんまりとしており、掘割の水もきれいで、都市の子供たちも十分に自然体験でき、また、郊外へちょっと出れば一面の里山や田園がありました。従って、「春の小川」「ほととぎす」といった歌を口ずさむとき、殆どの日本人は共通のイメージや情景を

もつことができました。ところがその様な景観や環境が失われることにより、体験がなくなり、いくら歌っても情景もイメージも広がらなくなって、小学校でも「ふるさと」や「春の小川」を教えなくなったそうで、非常に寂しい限りです。どんどん都市化が進む一方で、人工的なデザインの公園が造られています。若い親が「子供に自然体験をさせなければならない」ということで、里山に近い郊外の公園に出かけながら、人工的に整備されたところで遊ばせています。ここでは泥で服が汚れることもない半面、ほとんど生物も住んでいそうにもありません。そして夕方になると「今日は子供たちにいい自然体験をさせてやった」と満足して帰っていきます。しかし私から見ればもっとも自然体験をしているようには見えません。何故このようなチグハグなことが起こるかという、若い親たちは都市に生まれ都市で育て、もはや里山や谷川で遊んだ経験がありません。もしも経験があれば本物の里山や谷川で遊ばせるはずなのですが、遊び方を知りません。このように最近では体験のない世代がどんどん増えつつあります。

このような実状から、余暇活動としての市民参加による里山管理に、年齢・職業を超えて家族ぐるみで参加してもらい、体験を通していろいろな楽しさや面白さを知り、また、かつての風景を甦らせることにより、共通のアイデンティティといえますか、日本人としての文化や景観といったものを再構築する必要があると考えました。市民参加による里山の管理は里山の自然を取り戻すという点において重要であると同時に、もう一つ、人間の精神的な面でも非常に重要な鍵を握っていると私は考えます。歴史的に自然と共に生きてきた日本人と言われますが、その典型が桂離宮の庭園に見られます。萱葺き屋根の茶室、大自然の断崖絶壁や大河をイメージした石組や池、それに岩島に生える潮風に耐えた懸崖のマツの風情といったぐあいに、日本の大自然と豊かな農山村の風景が表現されています。オリジナルな環境や景観があったからこそ、日本庭園という世界に誇る1つの芸術・文化が生み出されたと思うのですが、現実の農山村の環境や風景、大自然がどんどん失われていく中で、こういった文化や芸術を継承するという点でも非常に危機的な状況にあるのではないかと思います。

### イギリスの里山・田園景観とBTCVの活動

次にイギリスへと話が飛びますが、イギリスでも同じようなことが戦後起こりました。イギリスの典型的な田園風景の重要な要素として、エンクロージャーの遺産である生垣のネットワークと並木があります。イギリスはもともと全土が原生林で覆われていましたが、西暦1世紀ごろにローマ人が侵入して以来、牧畜のためにどんどん森林を切り払って牧場に変え、一時は5%まで森林率が下がりました。17~18世紀になって羊毛産業が興ったとき、地主が農民を追い出して農地

を囲い込むという悲劇がありましたが、広い牧場に生垣のネットワークが形成され、牛や羊が夏の直射日光から休めるように緑陰樹も植えられました。こうして、点在する里山とともにイギリスの典型的な里山田園風景が形成されたのでした。ところが第2次大戦後に農業の機械化が普及すると、トラクターの操作性という点で、この生垣が邪魔になり、どんどん切り払われ、また、機械化にあわせて除草剤や農薬が使われました。その結果、景観がどんどん貧化し、野生の動植物もどんどん減っていきました。そこで科学者や市民達がこれは大変なことになるということで、市民参加による景観や環境を守ろうという運動を展開し始めました。

その先がけは、1959年にロンドンの郊外で42人の会員で発足した自然保護隊です。「田園地域における伝統的景観の維持を支援する」、「会員に対して自然保護の原理と実践を訓練、教育する」、「自然保護区やその他の学術的に重要な場所の維持管理を支援する」という3つの活動目標を掲げて活動を始めました。その後1970年にさらに全国的なボランティア活動による田園環境の保全の運動体にしようということで、BTCV (British Trust for Conservation Volunteers : 英国環境保全ボランティアトラスト) に組織を改変しました。新たに「田園地域における教育アメニティ利用に貢献する」、「都市地域における環境保全、自然復元活動を支援・促進する」、「国民全体に環境に対する認識を啓発する」、「学校教育現場での実践的な環境保全教育・自然保護教育を支援する」の4つの目標が加わり、計7つの目標を掲げて活動を展開していきました。

まず、ここでご紹介したいのは、1週間の合宿による保全活動(Natural Break Conservation Working Holiday)です。皆さんは「coffee break」という言葉をご存知だと思います。「ちょっと疲れたからコーヒーでも入れて一服しようか」ということですが、こちらの「Natural Break」は「こういった自然活動することによって一息入れよう」という意味で、決して自然破壊という意味ではありません。そして「Conservation Working Holiday」は、保全活動の作業がholidayになっているという絶妙なネーミングです。「Save Wild Life」、野生生物を助けよう、「Learn Skills」、こういった色々な活動に参加して保全技術を学びましょう、それから「Meet People」、こういった活動に参加することによって色々な人に会い、連帯していこうということです。

この合宿に申し込みますと、「いつ何時にどこそこの駅で待ってなさい」という通知が来ます。指示通りに待っているとミニバスが迎えに来て、宿泊場所となる作業現場に近い村の集会場などに連れて行ってくれます。プログラムによってはユースホステルや青少年活動センターのようなベッドのあるところに泊まる場合もありますが、基本的には寝袋持参の合宿です。私が10年程前に体験した際には、みんなで自炊

し、夜はマットを敷いて寝袋で寝ました。朝にはお弁当を作って現場に行き、道具を持って作業にかかります。ボランティア・リーダーが一連の作業の仕方について説明し、安全にも気を配ります。私が参加した際のリーダーはコンピュータアナリストが本職で、年に5回くらいボランティア・リーダーとして参加すると言っていました。私が参加したのは11月頃でしたから、県の職員や郵便局員、自動車学校の先生といったぐあいに社会人が殆どで、それぞれ休暇を取り、参加費を払って参加していました。春休みや夏休みには学生の参加が多く、複数のプログラムを「はしご」したりもするそうです。イギリスの里山も役割を失って密生状態であり、それを市民参加で柴刈りします。先程日本のササユリが1枚葉で耐えているのを紹介しましたが、イギリスでも、例えばブルーベルというヒヤシンスの原種が1枚葉で耐えていました。それが明るくしてやると、数年のうちに5月頃の林床一面にブルーベルの花園が出来上がります。このような風景を見ると、白雪姫の森や、眠れる森の美女といったディズニーのアニメに出てくる森の風景は作り事では無しに本当にある事が分かります。またドイツのミュンヘンの森では、柴刈り管理されることによって一面にイチリンソウの花が咲いています。北海道でもカタクリの花園や、エゾエンゴサクの花園など、色々な花園が管理することによって実際に存在し、一緒だと思えます。

## BTCVの活動システムと実績

ところで、BTCVでは技術訓練コースというのを別途に開いており、年中多くの場所で開催されています。チェーンソーを使うコース、木を切り倒してタマ切りするコース、植樹してアフターケアするコース、間伐材を利用して家具や細工物を作るクラフトの入門コース、リーダーがうまく参加者をコーディネートできるようにリーダーシップを養成するコースといった、色々なコースが用意されています。例えばチェーンソーのコースに参加してBTCVからライセンスをもらっている人は、用意されたチェーンソーを使い、10人以上の能率でどんどん切っていきます。そうすると一般参加者にはかっこよく見え、自分もチェーンソーの訓練コースに出て是非BTCVからチェーンソーのライセンスをもらおうとします。また、森の管理についての技術や知識を磨きたい人にも、そのようなメニューが用意されており、あたかも専門の林業家のようになれるのです。作業の合間の休憩や食事は楽しく、和やかな雰囲気です。寝食を共にし、同じ作業をして汗をかくことを通じ、ばらばらに集まった見知らぬ同士ですが、自然に連帯感や仲間意識が培われ、本当に親友のような仲になります。

ここで、1週間単位の保全作業合宿の仕組みを紹介しましょう。参加資格が16歳から70歳で、構成人数はリーダーが

安全確保や参加者全員のコミュニケーションを図れる範囲内ということから、ボランティア・リーダーを入れて12人、そして注目すべき点が友人同士の申し込みが2人までに制限されていることです。これはできるだけ見知らぬ同士をつなごうというのがBTCVのもう1つの大きな目標であることから、友達同士が5人も6人も一緒に参加しても、その人たちは既に友達同士ですから心は通じているので、できるだけ1人で参加してくださいというわけです。ただし中には内気な人や、1人では参加しにくい人もいるでしょうから、2人までは認めています。一方、ボランティア活動は他人のためや社会のために、義務や悲壮感をもって行うものではなく、自分自身の生活や人生を豊かにするために行うということが一般常識になっています。ですから、食事やBTCVの運営などの費用も含めて、大体当時のレートで6,000円か7,000円くらいの参加費を払います。1990年度の実績では、合宿数が534合宿でしたが、お正月もクリスマスも年中行われており、現在では700くらいに増えています。そして参加者数も当時5,500人だったのが、現在では10,000人くらいに増えています。

ここまではBTCVの保全活動として、1週間単位の保全合宿をご紹介しましたが、「できるだけ多くの人に参加の機会を提供する」とことや、「地域の環境問題を地域の人々の参加で解決する」ということへの対応、また、「1週間出たいけれど、時間的にも体力的にも自信がない」という人のために、Weekend Conservation Breakという、週末に実施する日帰りの保全活動が別に用意されています。さらに、週末が職業の関係で休めない人たちのためにはMid Week Breakという平日の保全活動のメニューが用意されています。また、子育て中のお父さんやお母さんも参加できるように、ボランティアのベビーシッターが用意されたり、障害者や子供たちも安心して参加できるようなメニューも用意されており、参加したければバリアフリーで誰でも参加できるように、実にきめの細かいシステムが用意されています。できるだけ多くの人々に参加してもらうことにより、自然の中でみんなが一緒にやることの大切さ、面白さ、充実感を体験してもらい、そこから環境問題や社会問題への認識を高めて、連帯して解決への道を開こうというわけです。

BTCVの財政収入について、1997年度のデータで見ると、年間の収入が約16億円（当時1ポンド=193円）です。内訳は中央政府および国立機関からの1年間の助成が3億9500万で24.7%、地方自治体が2億5100万で15.7%、企業、財団からの助成が2億9450万で18.4%、個人からの寄付が5980万ほどと、収入全体の62.4%を助成・寄付が占めています。その他の収入源として、保全プロジェクトの受託や、保全活動による収入もあります。水道局が水源の森づくりに植樹をBTCVに依頼し、それをボランティア作業で行って経費

が支払われるわけです。また、BTCV のロゴ入りのTシャツや木工品などの環境グッズの製作と販売による収入もあり、会費による収入はほんの微々たるものです。

ところで、何故行政や企業がこれほど多額の助成をするかといいますと、BTCV の市民参加の活動がこれからの人材づくりや、社会の安定、国づくりにとっていかに重要であるかを認識しているからです。国民がこういったボランティア活動にどんどん参加することによって、単に環境保全や環境認識が進むだけでなく、社会的な不安が消え、国民が精神的にも肉体的にも健康になることにより国の医療負担が減り、さらに教育効果や生きがいなどなど、多面的な波及効果に注目し、積極的な助成によりその下支えをしているわけです。

### 市民による里山管理の可能性と多面的効果

話を日本に戻しますと、現在では日本人の8割が都市に住んでいると言われており、そういった中で様々な社会的問題や環境問題が非常に深刻になっています。そこで私は、市民参加による里山管理に注目しました。長年の植生管理の研究成果を実際に活かそうにも、担い手がないという事情もあったからです。イギリスと同じく、日本の市民にも恐らく「緑の中で汗をかいてリフレッシュしたい」という潜在力があるに違いないと考え、最初は研究調査として始めました。新聞記者に依頼して記事にしてもらい、募集すると、たくさんの人から定員以上の応募があり、一部の人たちには我慢してもらうほどでした。

日曜日の朝に現地を集まってもらい、初めての人が殆どなので、まずは木の切り方や刈り取った柴の束ね方といった作業方法を講習し、作業が始まりました。ただしノルマは設けず、作業中もいくら喋ろうか寝そべろうか自由ですよ、という形で始めましたが、始まるとみんな夢中になりました。何故かといいますと、密生した低木を1本切ると、その分がパッと明るくなり、嬉しくなってまた1本、また1本と切ると、明るい区域がその分広がって、なんだか自分の領土がどんどん広がっていく気分になり、また、自分のやった仕事の結果がすぐ見えるからです。今時そんな仕事はなかなか無く、つい夢中になってしまうわけです。ですから「もう1時間経ちましたから休憩ですよ」と言っても、「あっ、もう1時間も経ったんですか」と、本人が驚くほどです。また、今回は私自身も初めての取組みで、老人には無理だと思い、65歳までに年齢を制限したのですが、「自分で責任を持つから是非参加させて」ということで参加してもらった72歳の方は、若い人たちに勝るとも劣らず作業をこなされました。老人でも十分に活動でき、また参加することによって足腰が弱らず、新しい友達も見つけられて、そういう意味でも非常に効果があると実感しました。柴刈りだけでなく、目をあらためて間伐も試みました。自分の切った木は責任をもって枝を下し、幹

は1m間隔で玉切りします。そして所定の場所に積み上げるという、結構ハードな作業をするのですが、これも「切った木が倒れるときの感激がなんともいえない」、「成果が見えてくる」ということでどんどん仕事が進みました。

作業直後にとったアンケート調査の感想では、「今日の柴刈りの楽しさ、しんどさはいかがでしたか？」の設問に対し、「楽しくてあんまりしんどいとかつらいと思わなかった」が総数69人のうちの43.5%、「楽しかったけれど同時にしんどいなども思った」が55.1%、「楽しさよりしんどさに閉口した」は0でした。私はこの「楽しさよりしんどさに閉口した」が半分は出るのではと予想していましたが、これが0と意外な結果になりました。そして「今後もこの様な機会があれば参加しますか」という問いに対し、複数回答ですが69人のうち45人が「今後も柴刈りに参加したい」と答え、「草刈りのようなもっと軽い作業なら」というちょっと消極的な人は1人だけ、また、「柴刈りを含め里山の色々な作業に参加したい(草刈り、間伐、山道の補修、炭焼き、薪割など)」が69人のうち55人で、「もう次からは参加したくない」はやはり0でした。このように参加する前は大変そうと思っていたものの、実際にやってみたら非常にやりがいがあって面白く、楽しかったようです。

一方、「次からは知人や友人も誘って参加したい」が18人、「子供や孫にも経験させたいので同伴したい」が17人と意外と少ないものでした。これは、自分は実際に体験したからやりがいや面白さがわかったが、その体験の無い子供や知人に言ってもわかるだろうか、と不安を感じたと推察され、その結果少ない数字になったのではと考えました。これはBTCVのスタッフも同様の意見で、体験の無い人たちは「ボランティア活動や里山管理という、なんかきつくて大変そう」という非常にネガティブにイメージしがちなのですが、実際に参加すると、案外面白くてやりがいがあることに気づき、中には病みつきになる人もどんどん出てくると言っており、私もその通りだと納得しました。従って、いかに参加する仕掛けを巧みに作り、多くの人に参加してもらうかが重要だと実感しました。

次に、子供達はどうだろうかということで、さる小学校の先生にクラスの子供達を連れてきて下さいと依頼しました。やってきた子供達も都会っ子で、里山管理はもちろんのこと、里山で遊んだ経験さえほとんどなさそうでした。ところが作業が始まるとやはり夢中になりました。なぜかと言うと、日頃「木を切るということは悪いこと」と教えられているのに「ここでは思いっきり切ることができる」という面白さがあります。そして「僕の切ったほうが太い」「いやいや、僕の切ったほうが太い」「じゃあもう1本切ろうか」というぐあい、競争するわけです。「そろそろ倒れるで一」という言葉や「よっしゃ」という言葉を発しており、無意識にワイワイガヤガ

ヤ言いながら作業を進めることで、協力心や仲間意識が培われていきます。教室の中では点数を競い、点数で評価されますが、ここではそうではありません。また「〇〇ちゃんは勉強はできないけど木を切るのは実にうまい」といった、人間の色々な能力の認識や別の評価軸がこのような活動を通して自然に生まれてくることも考えられます。現在では鉛筆も鉛筆削りで削るため、ナイフがうまく使えず、日本人の売りどころだった手先の器用さもおぼつかなくなっているのですが、里山での作業を通じて、剪定バサミやナタ、ノコギリを怪我しないように上手に使いこなすテクニックが培われます。また、ナタを振るときに周りに人がいないか他人に対して配慮することなど、人間社会におけるマナーや人格形成なども野外活動の中で育まれていくのではないかと思います。先生と生徒との暖かい人間関係も培われ、また、この場所を1年後、2年後に再訪すると、色々な花が咲いたり昆虫や野鳥がやって来たりといった具合に、自分のやった結果がみえることで、これこそ生きた理科教育であり環境教育ではないかと思えます。また家族で参加し、お父さんお母さん子供と一緒に柴刈りをすることによって、家族の絆も築かれます。かつて、子供は親の働く姿をみながら育ち、言われずともお父さんやお母さんに対する有り難さを感じたものですが、現代のお父さんは朝早くに出勤して夜遅くに帰ってくるという生活様式です。働く姿を子供達が見ることができず、家族のコミュニケーションや団欒も乏しくなりつつある中で、日曜日に家族ぐるみで参加することによってお父さんの頼もしさを感じたり、逆に子供の生き生きとした表情に和んだり、また、日常性を脱した実体験の中から自然に話題が弾むなど、非常に効果があるのではないかと思います。

一方、社会人が柴刈りをしたり、間伐材を利用して谷川に丸太橋をかけたり、といった活動をする中で、ウィークデーは都心のビルでオフィスワークをしている人たちの心の中に「あの谷川に自分達がかけた丸太橋がある」、「柴刈りしたあの場所ではそろそろユリが花を咲かせる頃ではないか」というような思いが広がり、非常に豊かな生活や人生になるのではと思います。よく仕事人間で働き詰めに働いてきた人が、定年退職したとたん「毎日何をしていたかわからない」「会社の人間関係もなくなってしまった」「友達もいない」というようなことになり、奥さんからは「濡れ落ち葉」などと疎まれるような例が多いそうです。そういう寂しい生活ではなく、働き盛りの時から余暇活動に関わることにより、定年退職してからも「いよいよそれが思いっきりできる」という豊かな人生が送れるのではないかと思います。また、里山の管理活動に使うノコや剪定バサミは、ゴルフクラブに比べて非常に安く、軍手など20円か30円です。ゴルフだとさらに会員権やプレー費などもかかります。これからは、日曜日でもゴルフクラブを持って出かけるよりも、ノコギリやナタを持ってい

る人のほうが先を行っているような、そんな時代に入っていくのではないかと思います。

## 国際ワーキングホリデーの開催と組織運営

以上のような市民参加による里山管理の試みから、大きな潜在力のあることや多面的な効果のあることが確信され、実際に参加者が中心になって自主的な活動が継続されるようにもなりました。そこで、このような市民活動をもっと社会にアピールし、より展開させることを目標に、BTCVと連携して10日間の保全作業合宿である「国際里山・田園保全ワーキングホリデー」を行うことにしました。1994年夏の第1回目は、当時私が在住し、研究活動のフィールドでもあった、和歌山県の橋本市で実施しました。引き続いて、大阪や高知、兵庫でも、それぞれの地域の活動グループが実行委員会をつくって行いましたが、その後私が九州に移ってからは、福岡県八女郡の農山村でもつばら開催しています。今年でもう9回目になりますが、毎回BTCVが募集したイギリス人がボランティア・リーダーを含め5人ずつやって来ます。一昨年にはオランダ人も2人参加しました。このような海外からの参加者、日本の都市からの参加者、そして地元住民が老若男女一緒になって、放置されてモヤシ林になったスギ・ヒノキ林の間伐や、崩壊した棚田の石積みの修復作業などを行います。ズブの素人の集まりでも、地元の林業家や高齢者の指導のもと、山林の管理や棚田の保全などの仕事が十分にできることが明らかになっています。この他にも、間伐材を活用した山道の階段工や、放置された農地に侵入したタケの除伐など、様々な作業があり、体験できます。また、作業を早めに切り上げて餅つきや盆踊りを楽しんだり、夕食後に村のお年寄りから藁草履の作り方を習ったりもします。海外からの参加者も、このような日本の農山村の環境や暮らし、伝統文化やコミュニティを知ることにより、これまで日本に対して持っていた、エコノミックアニマル的なネガティブな日本人像を、180度転換してしまいます。ですから、こういう草の根の環境保全活動を通して都市と農山村との断絶がクリアできるとともに、国際活動を通じて国境や人種、宗教、経済格差等の壁をクリアでき、地球規模のネットワークで環境保全や世界平和が実現できるのではないかと思います。

ところで、ボランティア作業といってもその活動や運営には費用がかかります。例えば昨年の国際合宿に要した費用の合計と、同じ仕事を地元の業者に発注した場合の費用を比較すると、ボランティア活動でやるほうが、かえって経費が高つくきます。この場合、参加者を現場に送り迎えするマイクロバスや、土石の運搬車のレンタル料にずいぶんかかっています。しかし、BTCVのように継続した組織活動ができるようになると、自前のマイクロバスや運搬車も持つことになり、そういう経費が要らなくなります。その分を抜いた場合の費

用はだいぶ業者見積もり費用に近づきます。さらに、参加者には10日間の合宿に15,000円の参加費を払っています。これは食料費や宿舎の費用に当ててのですが、参加者が払うわけですから経費としては要らなくなります。これも差し引くと、スギ・ヒノキ林の間伐の場合はほぼ同額、竹林の伐採の場合にはかえって安く、棚田の修復の場合は業者見積もりの半分以下になりました。従って、近い将来に活動組織が大きくなり、財政的にも基盤ができてマイクロバス等を自前で所有することが前提となりますが、業者と同等、またはより少ない費用で運営していけると言えます。ところが、そうなるのと地元業者の仕事を奪うのではないかという心配があります。しかし、過疎が進んで修復するための資金も得られず、地元業者自身がなかなか動けない状況の中では、こういった市民参加によって保全作業を行い、少しでも多くの市民が農山村環境の実状や、農山村社会が直面する問題を認識することによって、世論や社会的な支援にまで進むのではないかと思います。また、地元の経験ある高齢者達の指導を受けて技術を受け継ぐことも重要で、残念ながら人間には寿命がありますから、早く受け継がないとこういった技術も消えていきます。

同様に、市民参加による公園管理や里山管理が造園業者や林業家の仕事を奪うのではないかと心配する人がいますが、逆に市民が参加体験することで自然や緑に対する認識が高まり、目が肥えることとなります。庭づくりが盛んになり、景観や街の緑に対する要望や水準も高くなると予測されます。そうすると、新たに活発になる緑化修景の仕事や緑地、林地の管理の全てを市民参加でできるはずもなく、確実に業者の仕事も増えていくのではないかと思います。

## 市民参加の展開が未来をひらく

さて、最初にお話した福岡市の鴻巣山緑地保全地区においても、被圧され、立ち枯れの恐れがあるヤマザクラを回復するためにその周りの常緑樹を切り、市民参加で守ろうと考えました。しかし、市民の中に「木を切ることはけしからん」「それこそ自然破壊」という人もおり、いきなり切り出すと猛反対を受けることとなります。そこで、まずワークショップを開き、これまで皆様にお話したような事をスライドを交えて説明し、実際に現場でも実態を見てもらいました。その上で「皆さん、じゃあこの森をどうしたいと思いますか？」と意見を聞きました。すると反対だった人も「そういう実態があるんだったら、まあちょっとやってみましょうか」ということになり、実際に現場で樹木を抜き切りしてもらいました。すると、陽光が射し込んでその周辺がパッと明るくなります。すぐにワイルドフラワーが生えてくるわけではありませんが、森の中が明るくなって、しかし森が全部無くなったわけではなく、木はまだいっぱいありますので、「ああ、なんか言われたことがわかる気がする」「これからここにいろんな

ものが生えてくるのが楽しみや」という具合になりました。

こうして、各地で Natural Break の市民参加によって里山や都市近郊林などの管理を行うことにより、景観の多様性や種の多様性が回復されます。これは生態系の保全や土壌保全につながり、結果として国土保全や持続的な生産性が守られます。また、このような市民活動を通して連帯感や情熱が培われ、人材が養成されていきます。これは社会の安定につながります。このように見ると、市民の力はちっぽけですが、石を投げて波紋を起こすことによってこのようなプラスのサイクルが回りだし、その波が社会全体に広がっていくことが期待されます。そうすることによって、これからの日本の国土や社会が豊かに持続し、未来が広がっていくのではないかと私は市民参加による里山管理の活動は、重要な鍵を握るのではないかと思います。

(2000年9月14日北海道大学クラーク会館講堂において)